

他力 一 住職便り

「他力船」

【沈水式】

三代前の住職、義啓ぎけい（明治41〜昭和31）師は私の曾祖父です。

髭をはやした貫禄のある方だったとあるご門徒から聞かされたことがあります。戦中・戦後の苦勞多き時代、法務をつとめ仏法をつたえられました。

また多趣味な方でもありました。音楽や科学が好きで、趣味は特許の研究。またドブロク造りも大事な日課だったとか。興味のおもむくままに生きた人でもあったようです。

そして失敗の多い人でした。メロン栽培、トマト栽培に手を出し失敗。ひよこの人工ふ化失敗、時計を解体してはそのままゴミ箱行きにしてしまい、家の裏には特許研究で失敗したガラクタの山があったとか。

そんな曾祖父の逸話で、個人的に好きな話があります。

曾祖父はかつて学生時代、ボート部でした。あるとき一念発起して、ボート作りをはじめました。汗を流して、一夏かけて、ついに完成。子供を連れて通津の海へ進水式にでかけました。近所の人も一緒に。

ボートは海に浮かべると、あつという間に沈みました。どこかに穴があいていたのです。進水式ならぬ浸水式。またの名を「沈水式」。

さびしくボートをさびて帰る曾祖父親子・ご近所の方々。おいたわしい。



第十一号（平成二十五年四月）
専徳寺住職 弘中満雄

【進水式へ】

親鸞聖人の大變有名な和讃わさんがあります。

生死しじょうじの苦海くかいほとりなし

ひさしくしづめる われらをば

弥陀弘誓みだぐせいの ふねのみぞ

※弘誓…ご本願のこと

のせてかならず わたしける

先月のお彼岸。亡き両親・有縁の方の思ひ出をしのびつつ、人生の目的を再確認します。まよいの世界（此岸）からさどりの世界（彼岸）へ。彼岸へ渡るため、私はどんな船にのつたらよいか。

船は少しでも穴があいていたなら沈みます。自力の船は間違はなく沈みます。どんなに人が真面目に厳しく修行して、知識をつみ、経験をつみ、また心を清らかにしても、そこには悲しいかな、必ず煩惱という穴があいています。ましてや凡夫の私の作った船は穴だらけです。

彼岸を渡るのに「私はこう思います」、「私はこんな良い事を心がけています」と自力の船を作ろうとする私。曾祖父が笑っています。「それじゃあ、沈水式行きだ」と。自力船にのって、これまでどれ程まよいの海、苦しみの世界に沈んできたことか。

ようやく生まれた人間世界。勿体なくもここまで生かされてきました。弥陀の船、他力の船にのれよと聖人。功德一杯の本願の船、一点の穴なき仏の船。この度は乗船場を間違えないようにしたいものです。

他力船「阿弥陀丸」の乗船場は、何と言っても聴聞の場にあります。どうぞご参詣ください。一緒に乗船いたしませんか。